

あけのほし 2014年7月

## 「自立と自律」

菊田行住

「神に従わないであなたがたに従うことが、神の前に正しいかどうか、考えてください。わたしたちは、見たことや聞いたことを話さないではいけないのです。」

(使徒言行録4章19～20節)

わたしが正しいと考えていることを、相手が誰であろうとも、そのまま発言出来るようになりたい。これがわたしの考える自立した一人前の大人の姿でした。

しかし現実の自分の姿は情けないもので、職場でわたしなりに意見を持っていても、それを発言する勇気がなく、発言権を持っている人に合わせていました。学生時代には、大変威勢が良く、市役所の役人相手でも、堂々と正論を述べて、それなりに交渉を成功させていましたので（生活困窮者支援活動において）、その頃のわたしの姿から比べると、何とも惨めなものです。心の中では、これは間違っているなど思ったとしても、その事を言葉に発することが出来ないのです。職場の中で大勢を占めている考え方に異を唱えたとなると、その後、周りから孤立してしまうことを恐れていました。ただ、その一方で、たとえ周りから無視されようが、煙たがられようが、わたしが信じる道を通って行き、あるべき自立した一人の大人になりたいのだという思いも強くあったので、その狭間で葛藤して、いつも苦しんでいたのです。もし、そのような目標がなかったら、そんなに苦悩しなくてよかったとも思います。多数意見に従っていれば、安全でありましょう。多少おかしなことを職場で行われていても、黙って見過ごせば、少なくともわたしだけは難しい問題に巻き込まれないですみます。実際、多くの場面で、自分は新人だからしょうがないと言い訳したり、間違いを犯している人々を、心の中では軽蔑しているのに、表面上は当たり障りなく関わるといふことも、やっつけてしまっていました。

ですから、わたしが一番軽蔑して、憎んでいたのは、気が付けば、そんなわたし自身の姿だったのです。一番わたしにとって苦しいのは、自分を愛せないということでありました。そのような偽善的なわたしを憎んでいるその一方で、周りが悪い、世間が悪い、社会全体が悪いから自分が苦しむのだと、絶えず責任転嫁との狭間で行き来していました。

そのような自他の両方に対して、心を閉ざしてしまうような状態から解放されるためには、相手の立場や権力に左右されずに、わたしの正直な意見を表明出来るようになるしかないと考え着きました。そのためには、自らの行動を律して、周りの人々が敬意を払ってくれるような人物になるしかないと考えたのです。つまり、誰よりも自らの行動を自在にコントロールできるようになれば、職場で最も頼りになる有能な存在として認めてもらえるようになり、そこでの第一の発言権を手に入れることが出来るようになるだろうと考えたのです。

それからわたしは、「自立と自律」という年間目標を掲げて、何とか自他共に認めてもらえる理想のわたしの姿になるべく、努力を致しました。その甲斐あってか、職場での立場も向上し職員会議などではオピニオンリーダーとなることが出来ました。他の職員よりも、休みを惜しんで研修や行事に参加することで、知識も経験も積むこととなり、就職してから5年目あたりには、かなり自由に発言することが出来るようになり、当初の自立した一人前の大人になるという目標をかなり達成できたようにも思えました。

こうして、わたしは就職したての頃に比べて、かなりの自由を獲得できたわけですが、しかしそれで当初思い描いていたような、自らの姿を愛することが出来るようになったかという、結局、そうはなりません。それは何故かという、わたしの自由な意見の表明は、大変限られた範囲にしか適用されないからです。それは、わたしより立場の弱い人々や、経験が浅い同僚からの中で通用する自由さであって、わたしより立場が上の人々や上司に対しては、結局、元と同じで、顔色を伺いながらその意向に左右されつつ過ごしていました。心の中では、「この上司は、まったくわかっていない。」と思っていたとしても、トラブルを避けてその上司の考えに従ってしまうということは、依然として続いていたのです。ですから、そんな情けないわたしの姿を見なくてすむようになるためには、その職場でトップに立つしかないことになります。その職場の中で一番上の立場に立てば、自由に意見を述べ、皆に従わせることが出来るわけです。

しかし、もう分かっており、そのような権力や他の人々を制する力を手に入れて、わたしの考えを表明しようとするやり方は、限界があるのです。たとえ職場の長になり、自由にわたしの意向を表明出来たのだとしても、それはその職場の中に限られたことです。その枠から外れたところでは、依然として、一人前の大人として、自立したわたしとしては振る舞えないのです。そのようなわたしでは、本当の意味で、わたしのことを好きになることは出来ないでしょう。わか自身も、ある程度職場で発言権を得られるようになって、依然として満たされないままでした。それどころか、わたしよりも経験年数が浅くて、いつも指示に従っている他の職員が、わたしのことを本当のところどう思っているのか、恐れていました。もしかしたら、今頃みんなが集まって、わたしの悪口を言っているのではないかと本気で心配していました。

冒頭の聖書箇所は、見たことを見た通りに、聞いたことを聞いた通りに、自分に嘘をつくことなく、発言した二人の人物の言葉であります。彼らの自由さの源泉は、自らの中に、発言の正誤の根拠がないところから来ています。わたしの意見が正しいかどうかと考えていては、結局、「わたしと相手という関係に縛られます。ですから、わたしの立湯の安全かが、どうしても判断の基準の中心に来てしまうのです。そうならないためには、「わたしの外」に、判断の基準を置く必要があります。彼らはその外の基準として、イエス・キリストの神を選び、わたしの姿さえも、客観的な判断をするための材料の一つに置き換えたのです。